

第七章 戦争の記憶

令和七年（二〇二五）は、戦後八〇年を迎える年でもありました。

市では、戦争や戦時中の生活に関わる資料や体験談などの収集・保存に努めています。戦争を体験した人が少なくなる中、今後そうした資料の重要性は増していくでしょう。

本章では、栗野に残された、戦争の記憶をとどめる場所「ぼうくわかんししやう口栗野防空監視哨」と平和への祈りが込められた「青い目の人形」を紹介します。



▲現在の口栗野防空監視哨

粟野に残る戦争遺跡―口粟野防空監視哨―

五月には約二万株ものヤマツツジが咲き誇る口粟野の「あわの城山公園」は、多くの市民が訪れる憩いの場となっています。その城山の頂上に、戦時中に作られた「口粟野防空監視哨」の遺構が残っています。

●口粟野防空監視哨

時代は大正から昭和へと移り戦争の色が濃くなるにつれ、空襲への対策（防空）が強化されることとなりました。日中戦争が始まった昭和十二年（一九三七）に制定された「防空法」では、軍隊による防空の他、防空演習や灯火管制等、民間人が行う「民防空」が定められました。

さらに昭和一六年（一九四一）に策定された「栃木県防空計画」では、県内に四三カ所の防空監視哨が整備されました。防空監視哨は、敵機の飛来を見張り速やかに監視隊本部に連絡するための施設で、建物の最上階や山の上などに築かれました。鹿沼市域には、鹿沼（上野町）、西大芦（草久）、口粟野の三カ所に設置されました。

口粟野防空監視哨は、太平洋戦争が始まる直前の昭和一六年四月に城山の頂上に設置されました。そこでは、哨長一名・副哨長三名のほか口粟野在住の青年学校の生徒から約二五名が任命

され、一班八名の三班が二四時間体制で任務に当たりました。監視哨は哨舎（見張り小屋）と立哨壕、地下壕から構成され、現在見られるコンクリート遺構は立哨壕に当たります。立哨壕は音が大きく聞こえるよう上部がラツパ形になった円筒状の施設で現在は埋め立てられていますが、当時は大人が中に入って立てるほどに掘り下げられていたと考えられます。また、雨雪を避けるため八角形の木製の屋根が付けられていました。学生を含めた哨員たちは交替で、いつ訪れるか分からない敵機の飛来を目や耳で絶えず監視していたのです。

敗戦によって、防空監視哨の関係書類は全て焼却処分された上、哨舎は解体されました。

●保存に向けて

一般的に明治以降に起きた戦争に関わる戦跡や施設の遺構等を「戦争遺跡」と呼んでいます。「原爆ドーム」の世界遺産推薦の動きや、平成八年（一九九六）の文化財登録制度の創設等により、一九九〇年代以降、戦争遺跡保存の機運が高まってきます。しかし戦争遺跡には、明確な保護指針がなく、風化や喪失の加速が懸念されています。

そうした中、口粟野防空監視哨は、戦争の記憶を後世に伝える遺構として、地域の人たちを中心に保存の努力がなされてきました。平成三年（一九九一）、口粟野防空監視哨設置五十周年

記念事業委員会により、監視哨跡の記念石柱が建立されました。また、平成一五年（二〇〇三）に県が刊行した『栃木県の近代化遺産』では口栗野防空監視哨を含む県内一四件の軍事関連遺産がリストアップされています。さらに平成二四年（二〇一二）には、公益社団法人土木学会により、口栗野防空監視哨を含む栃木県内の軍事関連六施設が、「栃木県の防空関連施設群」として選奨土木遺産に認定されました。

こうして戦争遺跡としての評価が進むとともに、誘導路の整備など、保存と活用を図るための地域の人たちによる地道な努力が続けられています。

《参考文献》

口栗野防空監視哨設置五十周年記念事業委員会 『口栗野防空監視哨記念誌』 一九九一年

栃木県教育委員会 『栃木県の近代化遺産』 栃木県、二〇〇三年



▲当時の口栗野防空監視哨（『口栗野防空監視哨記念誌』より転載）

平和の使い 青い目の人形

現在、栗野小学校の昇降口の脇のガラスケースに二体の人形が飾られています。ひとつは日本人形、もうひとつは西洋人形です。この二体の人形は、かつて日本とアメリカの間で行われた戦争の中で数奇な運命をたどりしました。

●平和は子どもたちの交流から

昭和のはじめ、日本とアメリカ合衆国の間には緊張が高まりつつありました。アメリカでは日本から移住した日系人たちの排斥運動が盛んになり、日本でもアメリカに対する反発が大きくなってきます。そのような中、アメリカのシドニー・L・ギュリックを中心とする世界児童親善会は、子ども同士が理解し合うことが平和につながると考えて、ひな祭りに合わせて日本の幼稚園や小学校に人形を送ることを企画しました。この取り組みに日本側で協力したのは晩年の渋沢栄一でした。

昭和二年（一九二七）、一万二〇〇〇体を越える人形がアメリカから海を渡って横浜に上陸しました。人形の購入費は募金でまかなわれ、衣装はアメリカの少女たちの手作りでした。人形たちには、それぞれ名前が付けられていて、旅行切符・パスポート・手紙を携えていました。

たくさんの人形は「青い目の人形」と呼ばれて、日本各地で大

いに歓迎されます。日本からはお返しとして、アメリカに各県から市松人形が贈られました。

●栃木県にきた青い目の人形たち

栃木県には二一三体の人形がやってきました。今の鹿沼市には、栗野第一尋常高等小学校（栗野小学校）の他に、鹿沼尋常高等小学校（中央小学校）・西大芦高等小学校（閉校）・久我尋常高等小学校（閉校）などにも人形が届けられました。久我小学校では歓迎会が行われ、そのときの写真が残されています。

栗野小学校には、当時栗野小学校に通っていて、戦後に同校の校長になった谷中嘉雄が、当時を思い出して書いた記録が残っています。それによると、谷中氏が小学一年生だった昭和四年（一九二九）、全校集会で青い目の人形がステージに飾られて、全校児童で野口雨情作詞「青い目の人形」を歌ったといえます。人形がやってきて二年が過ぎていましたが、大切にされていたことが分かるエピソードです。



▲久我小学校の児童と青い目の人形

ちなみにこのときにはすでに日本人形が一緒の箱に入っていたようです。日本人形と一緒にいる理由は分かりませんが、一人ではかわいそうなので友達として用意されたのかもしれない。

●「鬼畜米英」のシンボル

日本とアメリカの友好を願って贈られた人形たちですが、昭和一六年（一九四一）、日本とアメリカは開戦し、太平洋戦争が始まってしまいます。するとアメリカから来た青い目の人形は、「鬼畜米英」のシンボルとして竹やりで突かれたり、焼かれたりして多くが処分されてしまいました。

栃木県内の青い目の人形の多くも失われ、現在、県内には六体しか現存していません。鹿沼市には、栗野小学校と中央小学校の二体が残っていますが、持っていたはずの旅行切符やパスポート、手紙などは無くなっていて、彼女たちの名前は分からなくなっていました。

●平和の使い

栗野小学校の青い目の人形と日本人形は、戦争中、校舎二階の暗室と呼ばれた準備室に移されていたようです。戦後になると人形は応接室に置かれ、昭和三九年（一九六四）に校舎が改築されると校長室に移されました。

昭和五二年（一九七七）、校長として栗野小学校（当時は栗野第一小学校）に戻ってきた谷中氏は、校長室の戸棚の上に置かれていた青い目の人形を見つけ、その意味と来歴を全児童に紹介しました。そして、改めて「メリー」という名前をつけて、かつてのように全校児童で「青い目の人形」の歌を歌ってお祝いをしたといっています。

それ以来、青い目の人形メリーは、栗野小学校で大切にされてきました。青い目の人形は、悲しい歴史とともに。未来への希望を今も私たちに伝えていきます。



▲栗野小学校の青い目の人形メリーと日本人形（金子輝子撮影）

《参考文献》

武田英子編『写真資料集 青い目の人形―日米友情の人形交流の記録』山口書店、一九八五年